

語彙総体論的研究の進展の期待

田 島 毓 堂

1 はじめに

私は正法眼蔵の言語学的な研究を終生の課題としながら、法華経読誦の際に気になって注意していたことを中心に、法華経の為字和訓の研究に関して、大学教員生活の多くの部分を費やしました。一応、『法華経為字和訓の研究』1999の刊行によって、切りをつけましたが、それと併行して、コンピュータの発達に伴い我々のような者にも使うことが出来るような時代に差し掛かり、八十年時代には、以前から興味を持っていた語彙研究に力を入れてきました。折しも名古屋大学では、名古屋大学国際開発研究科が出来、文学部からもその第二講座の国際協力専攻、協力講座としての国際文化協力講座に出講することになりました。そして、私は九十二年の開設当初から文学研究科の仕事は全部そのまま受け持ったままで出講することになりました。学生は留学生がほぼ半数、そこで一体どういう講義をしたらいいか考えました。文学研究科で開講しているような科目では学生にとって有益とは思えませんでした。当時どんな科目を担当し、どんな講座を開講していたか、今となっては記憶が十分ではありませんし、当時の資料を当の名古屋大学国際開発研究科に訊ねてみても三十年以上も前のことで分からないと言います。仕方有りませんので、幽かな記憶を辿って、思い出してみますが、正確なことではありませんので、誠に恐縮でございます。

その中で、私は語彙論を留学生にとっても役立つように工夫して講義することに致しました。それが、私が提唱した「比較語彙論」(『比較語彙研究序説』1999はそのテキスト版です)の初めだったと記憶しております。

2 比較語彙論の提唱—語彙研究の歩み

こうして「比較語彙論」の提唱に至ったのでありますが、語彙研究は言語研究の中では全く未開な状態にありまして、現在でもそうであります。現在に至っても、「語彙」という語が間違っただけの意味で使われていることが多いことから知られます。これはかなり酷い状態であり、学会に於いても平気で間違っただけの使い方をしている人がよくありました。私はその都度、注意をしてきました。最近では、学会にも出席しないのでどうなっているかは判りません。テキストなどに於いても、平気で間違えています。例えば「語彙数」などと言っています、「語数」のことをです。もう、一々指摘するのに疲れしました。

ここで少し歴史的に語彙について見ていきたいと思います。そもそも語彙を文字通りの語の集まりとして扱うようになったのは19世紀の末頃からであります。ただそれ以前にも、個々の語をあつかった研究は逆に恐らくどの部門より先に進んでいたかも知れないと思われれます。語の意味や語源等を探究する部門、それは、ある種の辞書として結実しておりました。中国に於いても、日本に於いても事情は同じように思われます。残念ながら西欧においてどうであったかは、その事情について暗い私には発言する力はありません。しかし、それは言ってみれば一々の語の意味の記述を寄せ集めた物、或いは、同様の意味の語を集め配列した物と言うことであります。その

集成はまさに語彙であります。それは、実際実用的に役立つものであります。辞書は、語彙の元たる語を意味別に集めた物、或いは、語の意味を記述したものであります。その全体、つまり「語彙」は記述されているということは言えても、語彙は、敢えて言えばそこに放り出されているだけです。語を集めた「語彙」の考察ではありません。近代に於いても、「～語彙」という名前の辞典・辞書がありますが、同じ事であり、語が何らかの順番に集められているご研究の集成であります。「語彙」に対しての考察とか研究ということはありません。

こういう語の意味の研究、それが辞書として結実したのは、まさに語彙の「元」（ある語）に対する研究の集成としてみることが出来ます。しかし、それで、語彙の研究ということが遂げられたのでしょうか。辞書の有用性は勿論あるのですが、それは、語の意味の研究と集成ということであり、「語彙」に対する研究はそれとは違うところにあります。

3 語彙の元と総体に関する研究

ところで、言語の研究をする場合、文法研究ならば、一々の語の文法的性質の研究、つまり一々の語の品詞の研究と、それらが集まって文書を作る際の規則の研究、の両者があります。つまり、文法研究と言えば、その単位の研究とそれが集まった全体の研究とが行われます。

音韻の研究も同様、個々の音韻についての種々の研究と、それらが結合して語を作る際の規則の研究等があります。つまり、単位としての音韻とそれが集まって語を作る全体の研究が行われます。

このことは、語彙に関しても同様に必要だと思います。語彙の単位としての語の研究と、語が集まって出来る「語彙」（語の集まり全体）の研究であります。

こういう経緯から、私は同じ「語彙研究」という言い方では、中々その判別が付きにくいことを感じました。それで、その「語彙」の元である語に対する語彙的研究を「語彙元素論」、全体に対する研究を「語彙総体論」名付けることを提案いたしました。本当はこんな名称が不用になって、語彙論と言えば、この両者を間違いなく指すのだという言う了解が出来上がれば、わざわざそんなことを言う必要はないのです。しかし、現実にはわざわざこういう区別を付けなければならない状況であることは、残念ながら認めざるをえません。

4 語彙総体論的研究の二方面

ところで、前述したように、個々の語に対する興味関心は恐らく他のどの部門より早く強く持たれていたと思います。辞書、或いは語源辞書などはその結果を示していると思われます。こういう語彙元素論的研究である語についての研究は早くから成されておりました。ただ、語彙を文字通りの語彙として研究対象にすることは有りませんでした。つまり、語彙総体論的研究は等閑にされておりました。しかし、前述のように十九世紀の末頃から、基本語彙などを選定することを主たる動機として語彙調査が行われ始めました。日本に於いても、この意味での語彙総体論的な研究は始められ、教育基本語彙などの選定が成されてきました。これは、語彙に対するある種の数量的研究の成果であります。この、語彙の数量的研究は二十世紀に於いても盛んに行われ、種々の成果を産出してあります。私自身も語彙の数量性について大いに興味を持ち、「語彙指標—語彙の数量的側面と語彙研究への視点—」（『日本語研究と日本語教育』（名古屋大学出版会）平成4年10月）などという論文を書いたりしていました。『窓ぎわのトットちゃん』については、かなり突っ込んだ研究も致しました。かなりの数の論文も書きました。そして語彙の数量的特性に大いに興味を抱いておりました。そして、その通有性と言うことも大変興味深い物がありました。

しかし、語彙は、個々の意味を持つ語の集まりであり、全体としてもその意味、即ち「その語

彙の意味」というものが有るはずで。ところが、この面での追究は殆ど行われていませんでした。その意味の把握が難題であることに依ります。僅かに、阪倉篤義氏の「万葉語彙の構造」(『万葉』34 1960)は語彙としての万葉集の意味を考えようとしたものでした。ところがこれに続くものはありませんでした。阪倉さん自身、直ぐに「その二」を書かれる予定であったようですが、遂に続編は現れませんでした。何故かと言えば、万葉集を語彙として捉える試み自体は画期的なことでしたが、幾つかの致命的な誤りを犯してしまっていました。それを克服しないことには前に進めないことが分かりました。

5 語彙の意味を意味分野別構造として捉える

私はこの阪倉篤義論文が気に掛かりながらそれ以上なかなか進めませんでした。比較語彙論を提案して(「比較語彙論の構想 一異文化比較研究のために」『国際開発研究フォーラム』2 (名古屋大学国際開発研究科) 1995.3)、語彙の数量的特性とともにその意味的特性を考える中で、阪倉篤義論文をじっくり検証してみました。そして、「語彙研究法としての『意味分野別構造分析法』のために一阪倉論文の顕彰と批判一」(『国語と国文学』77-6 2000.6)でその点について、発言いたしました。

現在、比較語彙論はここに述べたことが、基礎的な根拠になっております。語彙の意味を示すための基礎は『分類語彙表』によっていますが、これは、基本的に日本語に対応するものです。ただ、語の意味は各言語で対応の仕方、意味の切り取り方、その語彙に含まれる語の片寄りなど、それぞれ特徴がありますが、大まかに言えば、言語が異なっても、何とか翻訳・理解と言うことは可能です。と言うことは、意味というものは言語には共通するところがあると言えると思います。この点については、その証明はあるかと聞かれました、それは知りませんが、翻訳・理解が可能と言うことはその一つの証明かと思えます。

他言語について言えば、韓国語については、韓有錫さんがこれを翻訳した業績があります。その他の言語に対しても原理的にはコード付けは可能とは思います。もともと、『分類語彙表』そのものが、P.ROGETの「Thesaurus of English Words and Phrases, London 1851」を参考にした物でありますし、『分類語彙表』の前書きには外国語について20種類の分類体辞書が掲載されておりまして、日本語についても4種の意味分類体辞書が紹介されています。

また、私の指導生の何人かが日本版の『分類語彙表』によって日本語以外の対象語彙にコード付けをして、比較語彙論の研究をしたことはありますが(例えば、ジョジョック・スバルジョ「日本語・インドネシア語の比較語彙研究一日・イの基幹語彙的なものを使っての試み」1997.3、申シツォル「日韓語彙の比較研究一日・小学生基本語彙」を対象として」2001.3、ザイド・モハメド・ズイン「『分類語彙表』による語彙の比較研究一日・マレー両言語の教員基本語彙を対象に」2009.2 等)、私が退職して以後、残念ながらそれは続いていません。個々の語に対するコード付け、つまり意味分類ということが、非常に厄介で手間が掛かり、それでいて、中々キチンとした業績に結実しないことが、大きなネックになっているのだと思います。ただ、これからの時代、コンピュータを活用して、語彙調査を初めとして、コード付けについても或る程度の部分は自動化できるという期待もありますが、それには、私どもの努力が必要不可欠だと思います。2003年から、2006年まで続いた学術振興会科学研究補助金基盤研究A「語彙論の基盤となる語彙コード・単語コードの研究及びその電子辞書開発(課題番号15202010)」(平成15年度～18年度2003～2006)では限られた範囲ですが、電子辞書の試作品を公表しました。その後、その、増補などを怠っていますが、基礎として、これから増補していきたいと思えます。

6 語素コードの開発

周知のように、語には単純な語と二つ以上語や、語の成分が集まって出来た合成語・複合語（私はこの二者は特別区別せずに、「複合語」と言うことにしております）とがあります。『分類語彙表』などを御覧頂けば直ぐ分かることですが、一つのコードの元にかかなりの語があります。そこにある語はみな同じコードになるわけですが、一つのコードで、幾つかの語が示されるのですから、そのコードによって語を特定することは出来ません。そのコードは、その語がどんな意味分野に属するかを示す物なのであります。その語がただ一つの要素によって出来ているならばそれはそのコードの示す意味分野にしか属さないのですが、幾つかの要素から成っている複合語には、その語の属する主たる分野は示すことが出来ても、その語には、その主たる要素を修飾する要素その他の要素が含まれていますが、そういう部分の意味は無視されることになります（ただ一つの単純語にしても、その意味するところが、複数有れば、当然コードも複数になります）。このことは、意味を語の分類に用いているのに、無視される部分もあり、語の全体が十全にはそのコードでは示されないことを示します。そのことを補おうとするのが「語素コード」であります。個々の部分にコードを付けてその意味分野を示そうとするものであります。ただ、意味コードを付けるだけに比べれば数倍の手間暇が掛かりますが、一つの単語コードだけでは見落とされてしまう部分を掘り上げて、その語彙の意味分野別構造をより確実に示すことが出来るのではないかと考えて開発しました。

ただ、現在までにこの語素コードを活用した語彙分析はしておりません、構想の段階です。手始めに、正法眼蔵のサ変動詞と現代語のサ変動詞について、コード化していますので、その比較語彙論的分析を示すことが近い将来、出来ると思います。

（『語彙論の基盤となる語素コード・単語コードの研究及びその電子辞書開発』 科研（課題番号15202010）の最終報告書。『窓ぎわのトットちゃん』語彙のデータ確定版を掲載。）（「語素コードに関する提案—比較語彙論のために（その2）—」『語彙研究の可能性』1997.8）（広瀬英史氏と共著「語素コードを利用した研究方法—単語コードと語素コード—」）

7 標準的語彙の意味分野

もし、こういう物が成り立つとすれば、各種語彙との意味分野別構造を比較する語彙分析の基準が出来ると思います。そして、こういう物を作っていかなければならないと思います。

ここで、まず、何より、この「標準的な語彙の意味分野別構造」をどうして示すかについて考えてみます。

私は、今までに幾つかの語彙についてその意味分野別構造を示して参りました。そして、それを集計する形で保存しております。まだ、集計したのは大した数にも成りませんが、やがてこれがかかなりの数に達することになれば、それだけで直ぐに「標準的意味分野」とは言えませんが、これを拡充していけば、ある種の標準になることが出来るのではなかろうかと考えております。

そのためには、同じ形式で色んな方達により、いろんな語彙の意味分野別構造が示されること大切だと思いますが、その点について、まだ私が個人的に考えているだけで、今まで公表しておりません。できるだけ早く、実行に移したいと思っておりますが、今まで作った資料の点検など、やり直さなければならない多くの事があり、いつ出来るかは、年齢のことも考えると、時間との闘いですが、勝てるかどうか、現時点では、頑張るとしか言いようがありません。

8 終わりに

『東海学園 言語・文学・文化』の前身『東海学園国語国文』は、昭和43年に発足いたしましたし

た。その『東海学園 言語・文学・文化』が終刊を迎える事になったということで、感慨無量であります。それに当たって、寄稿を求められたのは、その依頼文書を見ると令和三年の十月でした。すっかり失念してしまって、先月になって、刊行委員会の宮田光先生からの原稿依頼の知らせがあり、慌てました。

昭和43年(1968)『東海学園国語国文』発刊当時は国文学科スタッフ6名でしたが、私がいつの間にか中心になって編集活動をしていました。年二回の発刊で、確か、国文学科の学生は全員会員として、会費も貰っていたように思います。そして、その頃は、非常勤の先生方をも含めて、私が寄稿者から原稿を調達していました。随分無理な要求もしましたが、それによって論文が書けて、結果として就職するとき助かったなどとも聞いておりました。

十年後、東海学園女子短大を退職致しましたが、その後も寄稿はしておりました。今回、時は移り、55年を経て、今度は遅れた原稿を請求される立場となり、年齢を強く感じております。

それとともに、もう、宮田先生以外、当時の同僚は亡くなってしまい、どなたも直接存じ上げない方ばかりになり、ここでも時の移り変わりの速さを痛感いたしております。

今回は、論文と言えるような原稿ではありません。私の見果てぬ夢を語りました。改めて、データを作成して論文を書く気力はもうありません。過去のことを思い出しながら、希望を書いているに過ぎないのですが、これを書くことによって、ほんの少しなりとも、比較語彙論の発展に対してほんの僅かにでも貢献できたらとおおけない望みをかけております。

折しも、高齢者達の病院通い、「かえろう病院」というテレビ番組を見ました。長生きしすぎたなと、反省しきりです。

ありがとうございました。

2023.4.22

注

田島毓堂(2000)『窓際のトットちゃん』語彙<一部>,名古屋大学大学院国際開発研究科,『比較語彙研究の試み5』開発・文化叢書35,2000 3,pp267-327

田島毓堂(2004a)『窓ぎわのトットちゃん』章別語彙の比較研究『国際シンポジウム比較語彙研究V』,2004 1,pp87-112

田島毓堂(2004b)『窓ぎわのトットちゃん』語彙データ,名古屋大学文学部,名古屋大学文学部研究論集 文学 50,2004 3,pp.37-50

田島毓堂(2004c)『窓際のトットちゃん』語彙2—基幹語彙と基調語彙—,『国際シンポジウム比較語彙研究VI』,2004 8,pp75-90

田島毓堂(2004d)『窓際のトットちゃん』語彙3—章別基調語彙の選定—,『国際シンポジウム比較語彙研究VII』,2004 8,pp75-92

田島毓堂(2004e)『窓ぎわのトットちゃん』語彙5—章別基調語彙選定のための指数とそれによって選定される基調語彙,語彙研究会,語彙研究2,2004 10,pp.1-29

田島毓堂(2005a)『窓ぎわのトットちゃん』語彙4—分布を中心に考える,愛知学院大学文学会,愛知学院大学論叢 (34) 20043 p.113-153

田島毓堂(2005b)『窓ぎわのトットちゃん』語彙—分布1の語について(その1)—,国際シンポジウム比較語彙研究 8,2005,pp.59-90

田島毓堂(2005c)『窓ぎわのトットちゃん』語彙7—分布1の語(その2)—,愛知学院大学人間文化研究所紀要(20) 2005.9,pp.274-239

田島毓堂(2005c)『窓ぎわのトットちゃん』語彙8—度数1の語(その1)—,国際シンポジウム比較語彙研究 9,2005,pp.55-78

- 田島毓堂(2005d)『窓ぎわのトットちゃん』語彙9—度数1の語(その2)—,愛知学院大学論叢 (35),2005,pp.167-177
- 田島毓堂(2006a)度数1の語について—『窓ぎわのトットちゃん』語彙から—,国際シンポジウム比較語彙研究 10,2006,pp.95-102
- 田島毓堂(2006b)使用頻度1の語 黒柳徹子著『窓ぎわのトットちゃん』語彙から,仏教文学芸能 関山和夫博士喜寿記念論集,2006.11
- 田島毓堂(2006c)『窓ぎわのトットちゃん』語彙(10)度数1の語(その3)度数率50%以上,愛知学院大学人間文化研究所紀要(21),2006.9,pp.284-257
- 田島毓堂(2007a)『窓ぎわのトットちゃん』語彙(11)度数1の語(その4),愛知学院大学人間文化研究所紀要(22),2007.9,pp.266-246
- 田島毓堂(2007b)『窓ぎわのトットちゃん』語彙(12)中間の語彙に関して(試案),愛知学院大学論叢 (37) ,2007,pp.69-81
- 田島毓堂(2008)『窓ぎわのトットちゃん』語彙(13)中間の語彙の品詞別構成,愛知学院大学論叢 (38) ,2008,pp.83-90
- 田島毓堂(2009a)『窓ぎわのトットちゃん』語彙14—中間の語彙の意味分野別構造 1 部門別比較,, 愛知学院大学人間文化研究所紀要(24),2009.9,pp.256-238
- 田島毓堂(2009b)『窓ぎわのトットちゃん』語彙(15)中間の語彙の意味分野別構造(2)中項目比較, 愛知学院大学論叢 (39),2009,pp.113-125
- 田島毓堂(2010a)『窓ぎわのトットちゃん』語彙(16)中間の語彙の意味分野別構造(3)コード別比較, 愛知学院大学人間文化研究所紀要(25),2010.9,pp.234-212
- 田島毓堂(2010b)『窓ぎわのトットちゃん』語彙について—単語コードと語素コードによる分析(1), 愛知学院大学論叢 (40), 2010,pp.1-24

Expectations for development of study on vocabulary as a whole

プロフィール

桂芳院住職。名古屋大学名誉教授。『正法眼蔵の国語学的研究』(1977)・『同 資料編』(1978)・『比較言語研究序説』(1999)・『法華経為字和訓の研究』(1999) 他。